

研究ノート

手づくりを一年¹⁾

—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用に向けて—

阿部 安成

Reading through *SEISHOU*

Yasunari ABE

Faculty of Economics, Shiga University

The National Oshimaseishoen Sanatorium is a facility for Hansen's disease. From the sanatorium, established in 1909, multiple serial publications have been published since the 1930's. However, due to a lack of resources at the time of World War II, publication stopped. Under these circumstances, in 1944, a magazine was made by hand in Oshimaseishoen. It was called "SEISHOU." It is an important text for understanding sanatoriums in the 1940s. This paper is part of the manuscript that reads through *SEISHOU*.

Keywords: sanatorium for Hansen's disease, historical materials, lives of survivors

『青松』を残す 過去や、過去から現在にいたる歴史は、なにかしらの痕跡がなければ、それがどういようすであれ、だれによってもあらわされることはない。わたしが調査と研究のフィールドとする国立療養所大島青松園（香川県高松市庵治町）には、第二次世界大戦の戦時下だった1944年に創刊され、その後も1948年までつづけていた「青松」という誌名の逐次刊行物があった。ただしこれは、印刷して世にだされた造物^{もの}ではない。1部かざりの手書きで手綴じによる手づくりの「廻覧雑誌」で、大島に生きる人びとのあいだで回し読みされていた同人誌だった。同誌が活版印刷によって発行されてからも、折にふれて、かつての手づくりのころの冊子がふりかえられ、その写真が『青松』誌上に掲載されてきた。この稀有な媒体^{メディア}があるがゆえに、わたしたちは、ハンセン病をめぐる療養所

の1940年代中葉のようすを知り、それを考え、書きあらわすことができるのである。

当事者にとっても貴重であるはずの同誌も、しかし、箱のなかに仕舞われたまま、いつのまにか忘れられてしまいそうになった。それが、活版『青松』の写真記事や大島で刊行された史誌や、そしてなにより、手づくり冊子を入れた箱に記された「手綴青松／第1号（S.19年）より」「創刊当時の／青松」との文字が、後世にその所在を報せていたのだった。

2005年に見出される端緒がひらかれた手づくり『青松』は、大島にある信徒団体のキリスト教霊交会が醸出した資金によってデジタル撮影され、そのデータをもとにリプリント版を刊行する予定となっている。療養所内でつづられ、継承されてきた、稀でめずらしい媒体もデジタル化されて

滋賀大学経済学部

¹⁾ 本稿は2016年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交^ませる」の成果の1つであり、阿部が監修し解説を寄せる「リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ4」（近現代資料刊行会）として刊行する予定の『青松』についてのノート「シリーズ『青松』を読む」の第12稿となる。先行する関連稿は本稿末尾に一覧を示した。

さらに後世へと継がれ、また、リプリント版によって閲覧される機会が増えようとしている。本稿は同誌を、わたしたちのつぎの時代へと継ぐために、また閲覧のための補助として、その史料紹介と解説の一端を開陳するものである。ここでは創始から1年を経たところでの『青松』をとりあげよう。(なお、史料の引用にさいして原文の誤字などには煩瑣となるためいちいちママをつけなかった)

第14号 ^{おもて}表紙に貼られた紙片に、題字「青松」、号数「第十四号」、特集名「青松一週年記念号」、発行年月日「昭和二十年十一月七日／発行」と記された『青松』第14号がある。表紙に用いられた紙には、「日清製粉株式会社／22 疋」などの文字が印刷されている。前第13号同様に粉袋を使用か。活かせるものはどれでも使おうとする、1940年代中葉の物資をめぐるようすがあらわれている。

「目次」の記載事項をあげよう。(無署名)「巻頭言」、初三庫元久子「図画(柿の秋)」、長田穂波「松籟海鼓」、土谷勉記「青松一週年座談会(十月二十八日夜)」、浅野繁「青松一周を迎へて／“青松”投稿者統計表」、笠居誠一、綾井譲、泉俊夫、赤沢正美、浅野繁、斉木操「短歌」、高二赤松清子「図画(針箱)」(無署名)「短歌合評(青松十三号より)」、喜田正秋、上野青翠、香山爽子、多田勇、藤田薫水、久我剛、大原枝風「俳句」(無署名)「俳句合評」、小見山和夫「十三号を読み(感想)」、高一山口忠夫「図画(雲)」、土谷勉「看護婦さん独唱会余滴」、斉木操「敗戦の自責に悩む義兄へ」、出席者河野、長瀬、篠原諸兄、土谷勉他有志「南方の話(座談会記事)」、高二戸田次郎「図画(菊)」(無署名)「あとがき」。

文学 無署名の「巻頭言」。

八月十五日の大変転に遭遇した衝動は我々の一生を賭してもあがなふことの出来ない汚辱と絶望とであつた。今尚我々は茫然とした状態の中で自己の執るべき道をも掴んではゐない。／今迄営々として築いて来た筈の思想、観念は根底からくつがえされた。しかし、文学はかうした歴史の転換期の暗澹とした混乱のドン底から新しい思想と共に発芽するのであることを信ずる。／今迄の文学は余りにも自由を束縛されたものであり、個人主義、唯物主義に毒された文学ではなかつたか、我々は新しく芽生つつある思想を育てると同時に自己を欺かぬ真の文学の樹立に専念しなければならぬ。

——「大変転」の時代の、「新しい思想」にみあう、「真の文学」を志す「巻頭言」が、「日本標準規格A4」の文字と梃目が印刷された原稿用紙に、きちんとした文字でい

ねいに記されている。

図画 「目次」にあるとおり本号には4名による4枚の「図画」が綴じられている。本号ではその場所がばらばらで、まとまってはいない。どれも、国民学校の初等科と高等科の生徒による作品だろう。

「巻頭言」のつぎに、「目次」にいう「柿の秋」の題のクレヨン画がある。表面の右端に「初三庫元久子」と鉛筆書きの署名。裏面は椎茸の下書きか。名まえを消した跡があり、判読はむづかしく、「子」だけかろうじて読める。これもまた庫元の署名か。

「潮音」と題された稿のつぎに、「目次」にみえる「針箱」の水彩画。裏面には、お皿に盛ったおそらく果物と牛乳瓶の下書きか。左端に「高二赤松清子」との鉛筆書き。剥がれてしまったのだろう、「高二赤松清子」とていねいな文字が記された附箋もある。針箱の影をも描くところに技巧をこらしたようすがうかがえる。

小見山稿「十三号を読み」のつぎに、「目次」にある「雲」の画か。画面のした1/3が海面、そのむこうには島影、空に渦巻く雲。どんよりとした風景だ。左端うえに、「高一／山口忠夫」と記された附箋が貼ってある。

そして、「あとがき」のつぎが、菊の画(ただし「目次」では「あとがき」があと)。左端うえに附箋が剥がれた跡があり、右端うえには、「高二戸田次郎」の署名がある。

みな、これまでも『青松』誌上に「図画」を寄せていた常連の子どもたちである。

復活 長田の寄稿は前号につづくも、その表題「松籟海鼓」は、『青松』の継続前誌といってよい逐次刊行物『藻汐草』の第13巻第6号(1944年5月)以来の蘇りとなる。原稿には、ページノンプルが1から9までである。

◎、青松記念之巻／それは丁度、藻汐誌が廃刊になつたばかりの時であつた。誰かの歌集出版祝賀会の席上で＝今後の大島文芸の発表方法＝同時に衰微の心配が話題となつた。／彼の時に庶務主任であつた土谷君が＝園長殿も文芸断切を憂ひられてゐる＝との旨をもらされたのであつた。情調生活が大島社会に持つ役割を思ふとすてゝをけない。／そのつい先刻、林先生が＝青山荘だより＝と言ふ随筆を我々に回された。それが大変に珍らしくもあり、又時代相でもあつたので我らも此形でやればと考へつゝあつた。／そこで『青山荘便り』の形式で患者便りとして内部的につゞけては』兎に角に何とかして青年文芸家を、しばまし度くないと提案したのであつた。／すると土谷君の曰く／私見として永続性が信

ぜられない……原稿が中絶するであらふ……然し穂波君が原稿くれるなら他者も永続すると思ふ……それなら実行しても良い。／噫、舌は禍ひの根とは能く言つたものよ。老人の冷水で青年に互して原稿を記して来たのであつた……。／彼の八月十五日＝無条件降伏＝噫、やられたのだ……敗戦だ！／『日本は今後どうなるのか？』／『我らの生活は何となるのか？』／大ゆれにゆれた。我らも無念の涙をのみつゝ、祖国の前途は真暗のやうに思へて……これでも一人前の心配はしたものである！！／斯る場合は＝青松でもあるまい＝との言説の出る事を憂ひられた。春三月より烈しき関節炎にてペン取る事もかなはなかつたが、……將に此際こそ大切だ、確に危機だ……と感じたので無理矢理にペン執つて出した。処が＝生れた青松は立派でおちつきがある＝この結果を見て、我が老婆心に過ぎしを思つて、おかしくなつたのであつた。／斯くして生れ、斯くして続け、／斯くして満一ヶ年の記念号とは／なつたのである。／そして同人各位は皆々私以上に努力を払はれ、その愛誌熱の跡は各号に明かに宿つて居るのである。／同人各位の労に深く感謝する次第である。尚ホ林先生のご鞭達に対して一入に感謝深きものがある。／◎、反省批評之巻／過去一ヶ年を省みて同人の文芸は……あしぶみ情態……と言ふ外はないと思ふ。元より内部的と言ふ処に既に張り気も起らない、であらふ事も考えられる。／然し我らは一度びペンを執れば全生命を賭してと迄ゆかずとも……真鍮の闘ひ……でなくてはならぬ。／自分は、原稿によりて特高警察より、又一般読者より叱責も嘲笑も受けてゐる、故にペンとる事は決して軽視できないのである。／我が文筆は＝一般社会人へ対して貢献せんと祈働である＝故に一面に於ては必關心を有してゐる。／決して自己満足では済ませない！！／同人各位の作品には＝社会へ進出する、広く働きかける＝と言ふ野心、否、気魄が甚だすくないと思ふ、これは考へて頂きたいものである。／文芸は決して遊戯でない精神的な社会生活の様式である。／明治、大正時代の思想を牛耳つた者は其多くが肺病文士であつた。彼らは血を咳き咳き時代に先駆し社会に働きかけたのである。／精神生活に於ては決して癩患は隔離されてゐないのである。働きかけざる者は社会を得られない事を知らねばならない……。／然して社会に無用な作品ならば死文芸に過ぎない＝何らかの社会、何階級かの誰かに必要な作品＝に迄、努力すべきであらふ！！／純文芸は、論説を超越し、利害の外に立つ

て存在するものである。まして利用すべきものでない……。これを論考し、これを儲け手段とし、これを如何なる意味に於ても利用なす等は＝冒瀆＝である……。／しかし斗の下の灯火なるべきでない。地上に照らない太陽は無益である……文芸は冒瀆すべきでないが活けるもの……でなければならぬ！！／文芸を為す心には癩菌をとゞめざれ！！／剛健なる精神を以て進出すべきなり！！／この点に於て園長殿初め職員各位の奨励批評が望ましい＝但し病者の自己慰安と言ふ消極の見方に止まらず。文芸的社会声明を育成する積極的な御指導が希望される……。／林先生には此上とも倍して御指導を願ひ上る次第である。／兎に角、同人各位の作品に新進の気魄が欲しい……この闘魂こそ我ら同人のみならず青松園の文芸生活を一般社会化するゆゑんである＝狭い島に住しながら一般社会に平等の位地を受け得るのである。／若き文士達が作品修練に当りて斯の気魄を持つて欲しい＝元より文は人なりと言ふ＝故に人格的にも高く潔き修養も大切な事である、奥床しき人とは文士の作品と共に慕敬に値すべき資格と言ふべきならむか……。／◎、新日本の暁明を迎ぐ／現は＝古きは去りて新らしくなる＝との再出発に臨むのである。元より過度期のゆれはあり、固定した世態を失へる淋しき不安もある。殊に人間は前後の考もなく習慣つけられて行く者が多い＝故に善悪に関せず古きを良と為る＝ものである。／いまは斯る心が暗に動いてゐる……未だ々々革新の生れ出る日本への理想は立つてゐない者が多い……よし、民衆主義デモクラシーだと言つても、莫然たるもので、その新しく生れ来た日本の何処に、如何に立つべきか！そこ迄、考へて用意して居る者は尠いのであるまいか。中には他人の説片のみ聞いて、それを自己の智識と思ひ違へて居る。これこそ新聞ラヂオ幽霊者に過ぎない……。／国家の敗戦による経済難と政治組織の動きによりて＝救癩事業にも何らかの影響があらふ＝そこに青松園にも改変が起るかも知れない。しかし、それは極小の事であらふ。大局は現在の延長であらふか？／目下の差迫つた問題は＝衣と食＝であつて是に皆が捕えられてゐる。確に精神餓となつてゐる。しかし一歩退きて静視するならば、大島現在の衣と食とは……他人の物や畑の芋を無断で失敬する程に切迫はしてゐないのである。／我らは最少し冷静になつて暮すべきで……そこに新日本に処すべき方途が明解され且つ準備なし得るであらふと思ふ……。／＝先ず神経餓鬼より解脱して／静かに前方を

注視すべしである／そこに初めて池中の巨龍として文芸は用意され、やがて雲を巻いて勇飛するであらふ＝／青松同人各位に対し敬意をもつて期待して止まないものである!!／文芸社会人として、かもし出される剛健にして香り高き作品を輯録して＝慰安会より出版する＝それは癩者が社会へコビて同情を乞ふ如き下卑なものでなく、反つて社会へ向つて権威ある出版となり度きものである!!／新しき日本に向つて青年よ大志を抱け!!／結語／青松誌は苦しい時局の底で生れ、苦しい難道に耐え忍びて、こゝに一周年を迎えた、一方ならぬ努力の歴史の大一頁を綴り得た＝この貴重な作品にも満足出来かぬ点がある。即ち文芸そのものが有する、価値、権威、理想、光明、等々の發揮に於て気力に欠けて居たうらみ＝ありと思ふ。／× × ×／現在われらは余りにも目先の事に捕はれて寧ろ神経病的に走つてゐる……。／しかし新しき日本は刻々として生れつゝある＝= 暁明にさめて眼を挙げねばならぬ!!／× × ×／そこに文芸人としての、一般人間の持ち得る平等の社会生活が幻される!!／そして、そこに又、従来の出版意識と全く異なつた出版が可能となる!!／× × ×／そこで是の幻を実現する資本は何か……根本問題である……他にあらず文士それぞれ各自の人格と高き理想とに基く努力にある。／そのために覚めて準備して欲いと願ふのが本稿の主なる目的である……。／私は以上もつて祝意を表する。〔原文の×は伏字ではなく文章の区切りをあらわしている〕——これが口頭であれば、堂々の大演説となつたことだろう。自分たちの「文芸」を「病者の自己慰安と言ふ消極的見方に止」めてはならない、そのためにも、「文士それぞれ各自の人格と高き理想とに基く努力」を發揮せよ、と長田は園内の同人にうたてている。

その裏面 長田の「松籟海鼓」は四百字原稿用紙の裏面に記されていた。「KYOKUTO 10 × 20」、「No.」 「No.1 10 × 20」の文字と罫目が印刷された表の面にもペン書きの文字が記されてある。「松籟海鼓」のページノブル1の裏面が44、おなじく2 - 45、3 - 43、4 - 42、5 - 85、6 - 46、7 - 73、8 - 72、9 - 74となる。

やはり、信仰をめぐる原稿のようで、「八、神の審判」(ページノブル42)、「十六、バベルの塔」(同85)の題目がみえる。

詩作 長田はつづいて、「『詩』の教室」と題した稿を載せた(署名は「ほなみ生」)。

若者よ子供よ、詩を学べ!／それは人間として情操修養

は大切だ。／そして我らの生活のうるをいのために。／◎、きのこかり／山の地肌の落葉の下に／はったけ、ずるたけ、ぷんぷんかほる。／友をさそいて木の子を狩れば／晴れた空より陽がわらふ。／遠く海原ながめてみれば／あつたあつたと友が呼ぶ。／夜の寝床に這入たのちも／きの子がりした手が匂ふ……。／面白いでせう。詩は決してムツカしくない。簡単に、美しく、そして目的を達する／此の三つが大切である。／詩は言葉や論文であらはし得ない情調が香るのだ、それを余情と言ふ。／この見本詩の私作は＝言文一致＝と言つて自由詩に近いものである!／しかし又これは七七調でもある。『調子』とは唄ふ『ふし』の事である。／○○○○○—○○○○○○○—五七調／○○○○○○○—○○○○○—七五調／字数を揃へて行を作る事で、字数は五五でも、八八でも良いのである＝中には変調とて、字数の揃つてゐないものに譜をつけた面白い詩楽曲も出来る…故に詩作としては余り字数に捕はれぬがよい!!殊に朗詠などは字数の揃つた正調でない自由な詩の方が反つて良いやうだ……。／但し英詩と漢詩とは定則がある。／◎、白雲／悠々として真なり／風にまかせて生命あり／弱くして強く／巧まざる姿…誇らざる美／晴雨曇風の預兆を示す／噫、流れ行く大空の白雲よ!!／視よ!／下界の人のセ、こましさ／強さふで内実弱く／巧粧にして醜の醜／生きむと藻掻きつゝ、死に急走す／悲哀なる不自然の人意よ!!／噫……我は／神の白雲とならまほし／全任の信仰に永生の真美はあり!!／これは私一流の宗教詩である。形式は純自由詩にして言文一致体で、言はゞ我儘な作品である。自然観、人生観、希願などが混然一体となつてゐる。斯くても確に詩である。／或る派の人々は、専横的に『固形』に凡てを押込まざれば承知しない……斯る人は多く資本主義文士である……故に私は余りに喰はない。花は紅色のみでない／月は円くのみ見えない、餅は角もひしも丸も長いのも出来る……呵々／◎、若い看護婦さん達にも作詩をおすゝめしたいと思ふ……必ず物の考へ方や見方がかわるでありませう／御心の海に美しく優しく、そしておほらかな情潮が、あたゝかく流れ満つるでありませう……!!／◎私の作曲／昨春頃より作曲を初めました。／心琴に和して素直に自由に表現／すると決意して＝私、独特の／音楽を創立すると威張てゐます。／五十種近い曲譜を査定しました／驚く勿れ、どれもこれも一つの／やうに似たものばかりです。／讚美歌の如き聖と俗曲と、そして哀調と歡調と＝何もかも

混／雑＝誠にヘンテコ音曲です。／然し私は決して失望しません、／斯くしてゐる内に『私の音楽』の根莖が定ると信ずるからです。／この習作の域を脱する頃には、確立した基礎の上に立つて自由／自在の活動が出来、活きた曲譜が現れ出すであります……私／は習作の雑炊曲譜を、寧ろいと／ほしんでゐます。以上／ムツかしい講議よりも、この一文の意を扱ひます、これをくまれて初心の人の作詩に應用せられむ事を望むものである!!／若い男女よ、子供達よ／詩を作りなさい、その養ふ情操は必／ず田を作る生涯の上にも、常にオアシスとなるであらふと思ふ……終／昭和二十年秋灯火の下に記す

——さきの「松籟海鼓」で長田がはっきりと記したとおり、彼にとっての「文芸」は「病者の自己慰安」にとどまらなかった。「詩を作りなさい」と、「若い男女」や「子供達」に告げた長田だった。

この裏面 ページノンプルのない『詩』の教室もまた、反故とした原稿用紙の裏に記してあった（「10×20」の文字、「KYOKUTO 10×20」の文字がある原稿用紙）。1枚めの裏面にページノンプル69があり、おなじく2-71、3-70、4-40、5-41というぐあいだ。やはり、「十三、方舟に入るべし」（69）の題目がみえる。

語る 「青松発刊／一週年記念座談会（十月二十八日夜）／出席者 総代 石本俊市／庶務部主任 三木康平／青松を育てた人々／土谷勉記」と記された扉がある。半ペラ原稿用紙には1から38までのページノンプルがある。

三木、今夕皆様に御足労願ひましたのは、ちょうど「青松」発刊一週年にあたりますので、記念座談会を一度開催したらと思つてをります。私としましてはその頃どんな経緯から発刊になつたのか、その間の詳しい事情は知りませんが、少くとも現在に於ては誰一人知らぬ者はいままでに皆に親しまれて来ました。私としましては何かよい機会があつたら一度皆様にお礼を申述べたいと思つてをりましたところ、はからずも今夕総代さんの発議によりまして皆様にお集りを願ひ、心から総代さんと共に御礼申し上げたいと思ひます。

石本、時局下御承知の物資不足の折柄とて皆様におかせられましては、執筆なさるのに何かと御不自由であつたこと、存じます。特に今井さんの御骨折でこゝに目度く一週を迎へることの出来たことはほんとに嬉しく思ひます。私はいつも出来上つた時と、帰つてきた時と欠がさず二度読んでをります。一ヶ年間続けるといふことは困難なことでありますが、一ヶ年つゞけたといふ

ことは一に皆様の御努力の結果でありまして、今晚はまあ「一ヶ年の思出」なり「今後どうやつて行つたらよいか」御希望なども承つたらと思つてをります。この席上を借りまして今迄の事については衷心より御礼申上げると共に、今後とも何分宜敷く御願ひ致します。

三木、今晚は五時といふことにしてゐたのでありますが、茶菓子の都合で六時になつたことをお詫び致します。／司会も何もありませんが、皆様から忌憚ない御意見や御感想を承つたらと思ひます。

◎「青松」の表情

石本、^{ひと}頃ちよつと淋しかつたが、今頃又になぎやかになつたやうだね。

小見山、私も最初は読むのさへ苦痛を感じずるやうな身体具合でしたが、今頃では自分でもどうにか読めるので、「青松」の来るのが一つの楽しみになりました。尚、林先生から御親切な批評がいただけるので、たのしみでもあり、大変な励みになります。

浅野、私なども途中で腰が砕けるのではないかと危ぶんでゐたのだが、実際林先生が力を入れて下さるので……。石本、実際林先生が親切に御指導して下さいますが、あからさまに言ふと、此方には指導者といふやうな者もゐないしね。

長田、実際です。

石本、園長先生も「藻汐草に代る機関誌をまうけたら言つて居られましたし……。

長田、よい記念碑を建てたことになるでせう。用紙を始め何や彼やと考へてみると、時局もこんな具合に變つたのだし、ほんとによい記念碑でした。

石本、短歌や俳句なども後から見ればよい記念になるのではないか。

浅野、「青松」は各自の筆蹟が遺るので又ちがつた興味がある。たとへば亡くなつた人があつた場合など一。

石本、謄写版など、は違つたよ^さがある。

三木、他所に廻すには謄写もよいが、内らだけで済ますのには「青松」のやうなのが却つてよいのではないかね。

小見山、表情だね。

石本、外に出すには余り雑然としてゐるから……。

三木、紙の大きいのが小さいのが一緒に綴ちてあるのも、何だか絵を見るやうな気がしてよい。

笠居、「青松」がなかつたら、短歌も俳句も作つてをらなかつたかも知れない。八月十五日からなどは作りたい

ののだがどうしても作れない。先生方さへどんなのを作つてゐるのかわからん。

石本、園長先生も発表機関といふそれを心配してをられた。若し発表機関が無かつたらやまつてしまふのぢやないかね。この点、園長先生から示唆をいたゞいたことは有難いと思つてゐる。

小見山、今でも作歌意慾を覚えるのは「青松」のお蔭だと思ふ。僕など恐らく「青松」がなかつたら作品は出来なかつたらう。

松田、「青松」がなかつたら自分でも何も書かなかつたらう。発表機関があるからペンを執る気持になる。これまで放つておいたのだから一。

小見山、自分が発表して居れば、他人の作品も熱心に読むやうになる。つまり自分の勉強になる訳だね。

長田、何かもつと素人絵でも載ればよいね。詰所の統計など載るが、あれは大変よい。やはらか味があつて一。

石本、今井さんがうめ草に時々するのだが

小見山、雑誌など見ても一行智識など、言ふやうな。

浅野、統計はよい。いろんな方面に於てよいと思つた。

◎よいと思つたこと

大原、今頃さつぱり出来ぬのだが、昔にかへるのでは発展がないし・一。実の処はどんなにやつたらよいのか迷つてゐる。

浅野、こんな時局になつたからと言つて、すつかり変わる訳でもあるまい。基礎は変らんぢやないかね。

大原、十月号から「鳴野」も出して呉れるらしい。印刷所が焼けたので今しばらくは謄写版で・・・。

石本、おへつではないが、実際、林先生も称められてゐたやうに「蒙疆の話」の座談会記事はよかつたね。林先生から新聞社の社長位になれる言つて称められたのだからね。(一同大笑)

斉木、林先生、マ司令部に沖縄の療養所のこと問合はされたのは本当ですか。

石本、マ司令部に本当に問合はされたのです。マ司令部に手紙でちゃんと問合はされたのです。ところが 大佐といふ人から返事が来たのです。何でも患者が現在七百八人程と日本人の医師が一人をるさうです。林先生は又早速、早田園長宛の手紙を同封して航空便に言付けられたさうです。沖縄では薬品なども全部米軍から給与されてゐるさうです。

三木、「青松」の寄稿者は差詰一ヶ所に住んでゐるのですけれど、これがそれぞれ別の処に住んでゐるのだつた

ら面白いだらうね。一ヶ所に住んで居るのでお互ひ全部知り合つてゐるから、まさか嘘も書けないだらうね。

小見山、詰所の方でも力を入れて下さるので何かにつけてやりよいですよ。

石本、一ヶ年を通じて一番よかつたといふやうなものはなかつたかね。

小見山、さうだね。

斉木、さあ一。

土谷、小見山君の十三号の原稿などよかつたのではないかね。

石本、あれはよかつたね。酒と杉との関係一。林先生は伊予の鬪牛を期待して居られるらしい。

斉木、昔のことは大凡なつかしいものなのだが、その意味から言つてもこんなやうな時世では古典的なものが親しまれるのではないかね。

浅野、自分など子供の頃、善い事も悪い事もして来たのだが、そんなことを人に書かれると思出してなつかしい。

斉木、日本人は大體懐古的ではなからうか。

浅野、短歌、俳句の場合は別だが、その他の文芸は、過去に於てやつてきたことを懐古的に、たとへば感想や隨筆などに書くと一層面白いのではないかね。

小見山、療養所内のことを描写した場合、吾々は馴れ過ぎてゐるといふのか、どうも感心しない。

斉木、私などイベリットといふものがないから子供の綴方のやうになり勝だ。今井さんなどこの点確固したものを持つてをられるが。

小見山、浅野君とも度々話したのだが、今井さんが前に書いてをられた「昔の癩のこぼれ譚」などのやうなものは興味がある。／「青松」には創作がない。もつとやつてほしいね。浅野君どうかね。

石本、梅野君は亡くなつたし、砂広(広田大作)君は書けないし・・・。

三木、創作となると体力が要るのではないかね。やつぱりカロリーが要るのではないかね。

松田、詩が淋しいが、浅野君など書いて呉れないかね。浅野君、短歌だとちよいちよいやれるが、長いものとなるとちよつと書けない。この点、長田さんや今井さんには感心だ。

◎対外的気魄

石本、よその療養所はどんなのかね。発表機関は作つてないのかね。

綾井、七月だつたか八月頃だつたか、九州の「草の花」

がきてゐたと思ふのだが。

石本、東京など何も出してゐないのかね。

笠居、他所に送つて見せるやうなものは出せぬのではないかね。

三木、通信が思ふやうにゆかぬのでさつぱり解らぬ。

斉木、大田博士、木下奎太郎先生は死なれたのですね。

石本、さうです。惜しい人でしたのに……。

長田、「青松」は内らのものだが、外にでも活潑に出すとなると、内田先生のやうな人が一人欲しいね。内田先生によつて外に出た人は沢山ある。これからはもつと外的に——文芸の世界には癩も肺も区別はないのだからもつと対外的に活躍する気魄とでも言ふものがこれからは必要ではないかね。「青松」は気魄に乏しい。もつと気魄が必要だ。／＼対外的に書かうと思へばもつと気魄が必要で、私など特高から何度も叱られるやら始末書を書かされるやら、対外的に書かうと思へば一つの覚悟が要る。対内的では発展に限度度があるが、これから発展するとなれば対外的だね。この点で内田先生のやうな気魄とでも言ふやうなものが必要だ。場合によつては頭を打つても叩かれてもかまはない。対内的にゴゾゴゾ言ふのはもう長い間ではないのではないかね。

小見山、物事何でも消極的なのがこゝの伝統ではないのかね。たしかにもつと気魄を持つ可きであるが。

長田、これでは実際発展がない。

浅野、結局、自信がないからでせう。どちらかと言へば自信がないからあやふやになる。

赤沢、林先生が外から指導して下さるのだから、内に一人たく者か欲しい。称めるのでなしに、鋭い批判がほしい。

小見山、宣伝を好まぬ御上品な処があるのだね。

赤沢、「青松」の歌と「白砂集」とを較べると、昔のによいものがある。

綾井、どんなのを作つてよいか解らん。この間も今井さんの処に原稿を持つて行つた処が、お前の歌は解らん言はれた。どんなのを作つてよいか実際わからん。

長田、一流の先生方でもわからんのではないかね。これからは生活と切離れぬ、つまり生活の中から突出たといふやうな——プロ文学のやうなのが出てくるのではないかね。

小見山、どんな歌を作つたらよいのかと誰も迷ふてゐるのだけれど、万葉集に較べて古今集の歌の形が變つてゐる処から見ると、今後も社会性に順応したものが自然に

出てくるのではないかね。

長田、社会性は作品の上に自然出て来るでせう。社会と共にあり、社会と共に生きて行くとしたら——昔から勅題の歌などが標準ではないのですか。

小見山、結社などもまだ革新されてゐないらしいね。

長田、指導者などいふものを中心にしてかたまらぬ同人組織といふやうな、たとへば「青松」のやうなのが、これからは発展するのではないでせうか。カタにはまらぬものは出ぬといふのではなしに——

小見山、竹柏会やアラ、ギを例にとれば、結社以外の作品は除外するといふのでなしに各人が自由な立場で作るといふ様な——従つて竹柏会などからは斉藤、木下といふ相当革新的のが出てゐる。

石本、先刻長田さんの言はれたやうにこんな時世になると、短歌の結社などの場合に於ても自由主義民主主義といふやうになるのでせうね。

笠居、こんなことを言ふと小見山君や浅野君に悪いけれど、多磨などはかなり独裁的だからね。この点「水甕」などかなり自由主義的だつた。

◎これからの道

浅野、自分の進むべき道を捜り当てるのが肝心だね。

斉木、これからは独創だね。

浅野、文学する場合と、さうでない場合とは無論気持の上に相違があるけれど、少くとも文学する場合には癩とか病気とか言ふことを忘れねばならぬ。

笠居、癩者の歌だから言つて割引してもらひたくないね。

綾井、「武蔵野」で誰だつたか言つてみたね。癩といふ特別の鑑賞はして貰ひたくないつて——

赤沢、匂ひとつでも言ふやうなことはあるかも知れんが、歌を作る場合には病気を忘れることが出来る。

笠居、療養所としてはどうしても同情を買ふと言ふ様になり勝だ。

松田、もつと紙でも自由に手に入るやうになつたら長田さんの「靈交」のやうなのが出て、さうなるとぼつぼつ本物になるのではないかね。

斉木、「青松」も数へ年二ツになつたのだから、これからはもつと本気でやらねばならぬ。

綾井、「藻汐草」より「青松」の方が名前がよい。

斉木、「青松」の方が名が新しい。「藻汐草」はちよつと古臭い。

長田、対内的にはもつと内省が必要だね。社会的に勇敢に進むと共に、お互ひ新しい日本の門出として根本的に

考へねばならぬ。泰西に於てなど、偉大な仕事を遺してゐる人々には完全な身体の人はいない。たとへばミルトンは盲目だし。吾々ももつと理想をもつて行かねばならぬ。赤沢、雑誌などもドンドン出るやうにならなければ。齊木、林先生からいたゞいて読んで始めて知つたのだが、藤田嗣治などは独創的だね。

小見山、「在仏十七年」などにも苦労してゐるのだね。

石本、とても苦労した人らしい。

長田、文芸的に進む上にとつて大島に居るからといふひげ目を負ふ必要はない。

齊木、マ司令部は言論の自由といふことを言ふが、吾々はかなり恵まれてゐると思ふ。

長田、療養所の文芸家が死んでしまつたね。

笠居、新しい者は現れないし——。

長田、どうして新しい者が出ないかといふことについて考へてみるのだが、それは先人の轍を踏むばかりであるまいか。もつと新しい処を開拓すべきだ。

小見山、刺激のないのにもよる。

長田、「青松」の同人は大島の文芸の先覚者と見做さねばならぬが、さうすると島の文芸如何は、今の者が新しい道を拓くこと。癩その物を取材してもかまはぬのだが、それをもつともつと突込んで、吾々から見た社会観といふものも欲しい。癩者の文芸が遊戯内面的であつた為に、癩者の作品が癩者に読まれぬといふこと——。かう考へると、山は今掘かけで無煙炭の出るのはこれからだ。無煙炭は他人に掘られたくない。大島の人々に掘ってもらひたい。さう思ふと同人にもつと熱を出して貰はねばならぬ。もつと広く大きく深く勉強する必要がある。こゝにをられるので言ふのも可笑しいが、今まで内の人からも外の人からも珍しがられ、どこからこんな資料を得たのだらうと喜ばれたのは「昔の癩のこぼれ譚」である。あれなどは皆に待たれ、実際はそこだけ読んだら、後は見ないといふやうになる。第一番は人に読まれる物を書くことだ。

笠居、「青松」の原稿は出来るだけ解り易く書かねば損だ。書きなぐつてもよい、読み易い人と読み難い人とがある。石本、小見山君は不自由なのだが、どんなにして書いてゐるのだね。

小見山（こんなにしてと恰好し乍ら）拡大鏡の眼鏡をかけかへて書きます。

三木、長田さんのやうに頬べたにくつゝけては——。

小見山、ほとほと原稿書くのが苦痛です。

長田、一ケ年つゞけたのだから、これからも一生懸命やりませう。

浅野、長田さんから気魄といふことをきくと、実際やらねばならぬと思ふ。若い者がピシピシ鞭打たれて、若い者の責任は重大だね

齊木 この腐蝕した頭では駄目だといふことが一番に来るね。

石本、あまり長くなつても如何かと思ひますので、これ位に打ち切りたいと思ひます。残つて話される方はいつまでも話していたゞきたいものです。／大島の文化は低いといふ人がありますが、今夕こゝに集つた人々は所謂文化人です。これからも「青松」の発展を祈ると共に、島の文化の向上に御努力を願ひたいと思ひます。

石本、三木、沢山の方々に集つていたゞいてほんとに有難うございました。ではごゆつくり／石本、三木、退席二十時／これから一同雑談に入り、二十一時たのしく散会——。

ページノンプル 38 が記された最終ページには、貼り紙があり、「潮音」の題目がある。

◎ちよつと必要があり（十一月二日調べ）病友五二三名のうちから義足を使用してをられる人を調べました。／結果が左の如くなりました。／片義足 男、三五名／女、一九名／両義足 男、五名／女、六名——文字起こしをするひとの巧みな能力によって、座談のようすが蘇っている。『青松』を手づくる一年をふりかえり、それとともに、自分たちの「文芸」と療養所での生活の展望をしっかりとみすえている。

自己の思想 浅野繁「感想／「青松」一週年を迎へて」は、謄写版刷り原稿用紙の罫目よりもちいさな、しっかりした文字で記されている。

◎去年自発的に用紙節約の意味で“藻汐草”を休刊したわれわれは一時中絶のやむなきに立ち至つた。一度中絶すると再び立ちあがることの容易でないことは誰しも知つてゐたが、時局の要請でもあり、国策の線にも沿ふことなのでいさぎよく休刊したのであつた。しかしいざ休刊してみると心の柱を失つたやうな頼りない気持ちに襲はれた。丁度そのころから療養の為に来島されてゐられた林文雄先生が園内廻覧紙として“青山荘だより”を發刊された。内容も外観も非常に整つたものであつた。それに刺戟されてわれわれもこのやうな園内機関紙を發刊したならとの話が出て遂ひに“青松”が呱呱の声をあげた。／十一月であつた。さて廻覧された第一号を手にして人

間味のある雑居生活とそれぞれ個性のある筆致とに接して一様に印刷されたものよりも、より興味があつたが、何といつても青山荘主人として林先生の微に入り細を穿った批評は誰も嬉しかつた。それから現在まで十四巻を発刊するのであるが、その間風邪で寝てゐられても、われわれの青松に態々克明な批評を戴いたことは、最初「続けられるか…どうか…」と危ぶんでゐた青松を現在までもり立てて来ることの出来た大きな原因であると思ふ。林先生に感謝の意を表する次第である。◎藻汐草末期時代、職員の中には文芸を理解して下さる方はあつても、よき指導者がなかつた。これは大島の文芸が他の療養所と比較して幼稚であつた所以でもあり、われわれは常によき指導者を希求してゐた。幸ひ林先生を得たことは暗闇の光でもあつた。／◎しかし、青松もやゝ軌道に乗つて進展し始めてゐたが八月十五日の悲しき終戦に遭遇したわれわれはこの青松も一端中絶と決心を余儀なくさせられた。青松どころの騒ぎではない。実際、日本人としてあの疾風怒濤時代の思想も主義も根底からくつがへされ、不安と焦燥と混乱の火中に転落したことは、あまりにも余期してゐなかつただけにその動揺も甚しかつた。個人的なものは一切顧みる余裕などあらう筈がなく明暮国の動きに集中して寧日もなかつた。新聞に報道に渦を巻いて叫ばれるものの、あまりに煩はしく目まぐるしい変貌に誰も不安に脅されぬ者はなかつたであらう…。軍閥の廃退、財閥の横暴、かてゝ加へて官僚の行為…、一切が秘密主義の中に隠蔽されてゐたものが言論の自由と同時に明るみにさらけ出されたのであるから一国民であるわれわれは如何に驚愕したことであらう。しかし愕然と色を失つたけれども国の行方について憂へぬ者はなかつたであらう…。けれども何時迄もその中に自己を低迷して置くことは出来ない。次には建設の使命をになはなければならない。文芸を志すもの文芸に覚醒されなければならない。さうした絶望の中に於て中絶しなければならなかつた青松ももり立てゝ来たことは青松を何物よりも愛着をもつてゐた為だと思はれる。あれから既に二ヶ月を経た現在に於ても、いまだ自己の思想を把握してゐる者はない。デモクラシーと叫ばれても真実デモクラシーを擱んでゐる者はない。まだまだ不安の余波は相当根強く残つてゐる。だが何時迄もかうした状態にゐることを欲するものでないかぎり、やがてそれぞれの思想をもつて立ちあがるのがきつと近き将来に来るであらう。いな、立ちあがりつゝあると思ふ。／◎ちつと眼

を閉ぢて青松のたどつて来た道を想ふと余りにも安易な既成概念によつて文芸されてゐることは嘆かはい。もつともつと気魄と勇氣とをもつて突進しなければならない。終戦の大変転はある意味に於てよい結果となるのではあるまいか。今までコツコツと育てゝ来た思想は崩潰して了つたけれども新しい思想を育てると同時に全身の気魄をもつて進出すべきではなからうか。あの悲惨な事実にうちひしがれて安易なる道に執りやうであつたなら国は亡んで了ふ。われわれのになすべき使命はより重大であることを最後に附記してこのつたない感想を擱く。二〇、一一、一

——浅野は療養所のなかで、「終戦の大変転」を経て、「自己の思想」も「真実デモクラシー」も、現在の、自分たちの課題なのだとかかっている。

浅野の稿のあとに、「青松」投稿者統計表がある。そのなかから担当「編輯者」を確認しよう（「1巻」「2々」の表記となっているが、ここではこれまでのとおり、第1号、とする）。

第1号＝土谷、第2号＝浅野、第3、4号＝土谷、第5号＝笠居、第6号＝綾井、第7号＝浅野、第8号＝泉、第9号＝笠居、第10号＝土谷、浅野（「合同」）、第11、12、13号＝土谷、第14号＝浅野で、土谷がもっとも多く、そのつぎが浅野。手書き手づくり『青松』の編集は、療養者が担っていた。ただし、その前身ともいふべき「園内廻覧紙として“青山荘だより”」があつたという。林のその稿は、『青松』のページに継がれている。ただし、『青松』のさきがけとなつたという「青山荘だより」は、いままでのところ大島ではみつつかっていない。

看護婦独唱 つぎのページは、「潮音」のように文章の全体を囲む線が引いてある。表題は「看護婦さんの珍しい独唱会（十一月二日十九時半より）」。

ほんとに楽しいことであつた。だしぬけにこんな珍しい催しがあらうとは夢にも知らず、先づ「防諜」のたしかに驚嘆する。婦長さんと言ひ、副婦長さんといひ、一場の挨拶を以てして聴者の心を和げ、たとへ間違ひを仕出かしてもとがめ立ての出来さうもない実りだ、親しい心理状態においてしまつた。たとへ後々不出来であつても、立派な予防線が張れた訳、なんて、そんなことは言ふものでない。御二人のくだけた挨拶ですつかり骨抜きにされてしまひ、だゞもううれしくおかしく次々の歌をたのしみに「誰々だ」「彼々だ」と、看護婦さんの面影を臉に描き班毎の氏名発表がある度に、「それみる誰々さん

だ」「誰々さんと思つたがちがつたか」と、歌の上手下手より、名前を当てた方の自慢、負けた者の負惜みー。秋の夕べの更けるも知らず謝辞のため此方にスイッチが切換へされて初めて吾にかへつたとは迂闊千万。吾にもあらず顧みて、婦長さん初め今夜のこの催しに出場して下さつた多くの方々に心から感謝した次第である。土谷勉

——名をあてるとは、覆面したか幕を引いて歌つたか。在園者を楽しませた催しのようだ。

この稿の裏面には、鉛筆書きで「病友軍の／優勝／十七号半田道人」とある。さきの独唱会とは関係がなさそうだ。ただこの縦罫紙の上部には、「わかもと」の文字と、砲丸投げをする人物の絵と「WAKAMOTO」の文字とが○で囲まれた社章？がある。わかもと製菓の用箋か。

一覧表 「短歌」と見出しのついた表がある。「◎附記」として――

この一ケ年を通じての統計を取つた、興味あるものと思ふ。無休投稿者、僅に四名といふ現状である。身体の状態の如何によつてかゝる結果を見た事のやむを得ないとしても万難を排して青松をもり立てて行きたいものである。十五巻より精一ぱいの頑張を見せて欲しいものである。／◎林文雄先生にハ続けて御高評を賜つてゐます、その事を統計にのせなければならぬのですが、悪しからず御寛恕のほど、然し四巻の久米大兄の追悼歌六首の表記致しました。尚、この後ともわれわれの為に御高評を続けて賜るやう紙上ながら願ひ致します。

とのこと。『青松』において「短歌」に重要な位置をあたえていたようすがうかがえる。

夕べ 「笠居誠一」の署名は後筆か。短歌がならぶ。

復員の兵を犒ふ夜の部屋に真赫に燃えて葉鶏頭の花／雨雨雨止まず降りつく霖雨なかあめに倦み疲れたる眼は曇りけり／さす潮の香の清々し砂浜に船底見せて船は傾く／船の底焼く火の煙夕風の浦に霞みの如く漂よふ／獅子舞の太鼓の音は聞きにけり四里へだてたるこの島にして「十月一日は故郷の宇佐神社の宵宮である西の浜にて聞く獅子舞の太鼓」／清掃せる朝の参道をふみてゆく己が足跡のみだれ悲しき／更生を祈る御前の朝空に羽風も寒く雁は渡れり／癩院に果つる生命と思ひつつ島山畑に大根種蒔く／朝夕あさよには手足に冷えを知る頃の底にこぼれて紅萩の花／傘さして下り立つ庭に紅萩〔以下断裂〕短歌／民族の興亡は想へ兵燹の街の暗〔断裂〕すむ／灰燼の街の夜空にまどかなる月の光は地平照せる／笛吹けど踊る人な

き敗戦の現実にはほけし身を如何にせむ／敗戦の現実に想ふ凡庸の出では国の道をあやまる／そばの花咲く島畑に人動く影細長う夕づきにけり／夕茜射す玻璃窓に空仰ぐ癩者の顔は輝きにけり／音のして癩院の空低う飛ぶ翼の星は物思はする／朝の庭に桜の落葉搔きにつ、昨夜は相見し人の計を聞く／島の間に群れる小舟はちぬ釣りが潮の流れに位置をかへたる／漁火の光を浄らに更くる夜の磯に砕けて白き波の穂／死に近き友の看護みとりに更る夜の窓に下弦の月は澄みけり／深沈と眠る病舎にうなされし人は苦しき声をあげけり

いもづる 綾井讓の短歌は、「二十字詰十行」「水甕社原稿用紙」の文字と罫目が印刷された半ペラの原稿用紙に記されている。

海水に藜蔓ここだ入れて炊きなほ生きむとす命うたがふ／何のために斯くなりしぞとつきつめて思へば憎し軍の誰彼／よかりしと喜びたまふ父母の我れになけれど命いとしむ／明暮れにまこと自由の来る日まで生きむと思ふ藜蔓を煮る／衣食住にかかはる記事を多く読み夕暮れ近き図書室を出る／恙なき一と日の昏れは有難し手足の土をねもごろに洗ふ

百舌鳥 泉俊夫「短歌詠草／秋惜秒五首」。

久々の日射しよ嬉し天つ日はかくも美しく暖かきかも／秋ははや朝戸夕戸を打敲く風音躬にぞ沁みてひびかふ／ひたすらになき澄む虫のこゑいよよか細く清よくなりけるかも／ゆく秋の島の寂けさ朝々は百舌鳥の鋭ごゑの澄みとほりつ、／行き通よふ船影もなく明暮の海は淋しゑ今日も昏れつ、

遠くを 「国華」の原稿用紙を使った赤沢正美「青松詠草」。

気ぜはしく歩む足音遠のきてふた、び路の夜は冷ゆるらし／静けさを乱すともなき瀬の音の遠きひびきにねむらむとす／き、なれし遠き瀬音のありなれて癒ゆるなき身の久しかりけり／釣糸を思ひのまゝにのぼしつ、朝風の海を見渡しにけり／釣糸を引く感触のはげしさに心はずめり朝風の海／晴れてゆく雲の動きに佇づみて湧きくるものもあらざりにけり／打ち寄する波音もなき夕闇の遠くはかなし犬の啼く声／動くとも見えぬ白帆の遠のきて物音こほしき海となりたり／思考力つかれし瞳まみに冷ゆる灯の光澄みながら凝りてゆくらし

打ち寄す 浅野繁は自己の「青松短歌」を「颱風以後」と題した。

颱風のきぞ過ぎゆるける海のうちへをびただしくも家具の流

るる／颱風晴れの海を流るる藁屋根にほそほそと鳴けり
 こほろぎのこゑ／颱風のあとの秋日のあかるき渚べにまだ
 新しき位牌流れ来／位牌のうちよせられし颱風のあと
 はしんかんとして陽の照る渚／拾ひ来し位牌の面の乾き
 ゆく秋日の縁につくづくと坐ぬ／颱風あとは何かむなし
 き秋日なり流木の肌の乾くを見つつ／硝子戸に桐の葉群
 の影揺るる月夜の更けはい寝あえなくに／あさましき現
 実／もの啖ふ夢よりさめて窓玻璃の青き月光に嘆かなむ
 とす／襟度とふ何ぞあえなしまごまごまごとの行為の眼
 に触れにける／みづからを嘲りつつも食ふことに話題は
 尽きず日の暮れ方は／身みづから欺きあえぬ明暮にひと
 の裸形をぢかに見にしか／夜の更けの路往きつかればたと
 逢ひしこうばしき香に自を賤めぬ／世相／むなしかる
 装ひをして生くゆえに遂ひに見せたるその裸形かも／身
 みづから斯くひとの多き世のさびしき際を覗ひにけり／
 底しれぬこのうつろさの涯よりぞ興るもの音をひたに頼
 まむ／銭金の価値もなき相ぞひとと片のパンにいさほふ巷
 のひびき／海辺拾遺／秋は朝綱曳く漁夫にうちまじる童
 のこゑのすこやかにして／網曳きする蚕の童の日に焦げ
 てときに笑みつつ白き歯を見す／禪しめて網曳きはたら
 く蚕の子の日に焼けにけりその出臍をも／曳網の曳き挟
 まるる須臾にしてあぎとふ魚の肌光らしぬ／竹籠にうち
 あげられてしばらくは跳ねかへる魚の陽を耀かす／唵喞
 の絶えゆく魚を瞻りつつもだしるにけりさびしき耐へて
 ／たらちね／音信のたえてひさしき母刀自をいちづに念
 ふ雲灼くる海

——浅野稿の裏面は、「OS原稿用紙」「10×20」の文字
 と柀目が印刷された原稿用紙で、1枚めは、その欄外に
 「十三年度」「祖母の死其の三」と記され、柀目には「鉄扉
 より漏る、焔を瞻りつつわがいのちは今も現ならぬに／葬所
 に骨を拾へば移り来し朝日の光ふかく差したり／ホークも
 て飯おし給ふわが祖母よしばしば寂し歯に触れければ」の
 3首。

2枚めにもやはり欄外に「十三年度」「祖母ノ死其ノ二」
 と記され、柀目には——

眸に滲む生温きものをひたかくし悔みを給ふ人と対へり
 ／祖母の解剖あり別れ難く吾が外に佇みておしに／祖母
 の腹いまか裂くらし解剖刀の音にあやうくこゑたてむと
 す／残りすくなき髪を切らせてくつろぎぬし祖母の姿の
 想はる、日や／瞳孔を診やる医師の口もとをこころ怯え
 つつぬすみ瞻にけり／脈をとるわが掌にそれとかよふほ
 ど祖母の倦みの失せてゆくはや／祖母はいたく好みまし

しとつぶやきつつ夜更けを醒めてトマトを喰ぶる、／
 病理解剖は終りたるらし春の空に太き息して医師は出で
 来ぬ／祖母の眼をしばし離れ来て仰ぐ蒼蒼すでに漲らふ
 か春の光りは／隠亡の汚れし掌より燐火取りて祖母を焼
 かむと思ひきはまる

——ペンの手は、ひとまず、浅野とは違うとみえる。

3枚めの裏は、「日本標準規格 A4」の文字と柀目が印刷
 されている原稿用紙で、「拝復／お便り嬉しく拝見、貴君
 の御病氣、如何が／旧作とふお歌、拝見しながらと胸を」
 の記載のみあり。

とらえかえす 齊木操はその詠む「短歌」に「敗戦」と
 題をつけた。

還らざる征矢のひびきの香けくも幽かながらにむせぶ音
 色や（英霊に想ふ）／よこしまの戦さなりとは疑はず
 純忠逸やに逝ける男の子ら（特攻隊の霊を悼む）／より
 多く物欲るいくさあきらかに神慮にふれき伏して嘆げか
 ふ／食膳に向ふ日に日に戦争の残虐性をしみみに思ふ。
 ／征矢高く空に真向ふものなりと落つことはり想はざ
 りしか／（戦争指導者達へ）／純真にしてためらひもな
 き雄心の冥路に迷どふ霊想ふべし／（責任回避論者へ）
 ／亡国のやからを捕りて八ッ裂きに討ちてしみむも慰ゆ
 なきながら／戦ひに死ににきうから今更らに夜々の夢に
 ぞ顛ち省り来て／幾万言吐きて詮なきことながら歌など
 詠みて憂さ払ふべく／× × ×／皇天の上におはせる
 畏さを臣下にし迷どふありとこそ慟哭け／（謹みて一部
 過激分子を論す。）

——かつて「八ッ裂き」の語は、米軍機の「醜翼」に向け
 られていた。いまここでその怨念の的となった「亡国のや
 から」とは、だれか?。「疑」うことができなかった、実
 は「よこしまの」といまいわざるを得ない「戦さ」、いま
 あらためておもう「戦争の残虐性」、そうした戦争がいま、
 とらえかえされている。

配給のよろこび 齊木の原稿の裏は「潮音」。

「松茸、松茸などがぜいたくな吾々の口に入るものか」
 ／「だつて今日呉れるさうぢや」／「ほんとか」／「ほ
 んとだとも」／「大した物だぜ。百匁が七円もするいふ
 噂ぢや」／「そんなにするんかい」／「それでも仲々手
 に入らぬさうぢや」／「だつたら二十匁で一円四十銭」
 ／「さうだよ。飯にしても汁にしても咽になり込むぜ」
 ／「ほんとに美味すぎるからね。あの匂ひがたまらない
 や」／「お前うますぎるなんておかしな言草するな」／
 「だつて美味すぎて、飯の方がたり苦しいんだもの」／「さ

う言へばさうだ、お互ひ様に」／“松茸や知らぬ木の葉のへばりつく”芭蕉／“まつたけや人にとらるゝ鼻の先”去来／“松茸の山かきわとる匂ひかな”支考／“土の香や松茸山の通り雨”虚子／十一月二日突然、松茸病友に配給さる、喜びたとへるに物なし。しかもお菜とは余分に一人前二十一匁（詰所配給正味）。各部屋毎炊煙が秋空に上つてゐるではないか、どこに不平があるのぢや——よほどうれしい松茸配給だったのだろう。おそらくフィクションの会話を入れ、過去の句例をあげ、それをよろこんでいる。

【関連文献一覧】

- シリーズ『青松』を読む①「手づくりで始まる」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 243、2015年12月（副題省略。以下同）
- シリーズ『青松』を読む②「手づくりで詠む」同前 No. 244、2016年1月
- シリーズ『青松』を読む③「手づくりで偲ぶ」同前 No. 250、2016年4月
- シリーズ『青松』を読む④「手づくりで悼む」同前 No. 251、2016年4月
- シリーズ『青松』を読む⑤「手づくりを保つ」同前 No. 255、2016年7月
- シリーズ『青松』を読む⑥「手づくりで伝える」同前 No. 256、2016年8月
- シリーズ『青松』を読む⑦「手づくると、戦ひと、拳島へ」『滋賀大学経済学部研究年報』vol.23、2016年11月
- シリーズ『青松』を読む⑧「手づくりが震え戦く」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 257、2016年9月
- シリーズ『青松』を読む⑨「手づくりが続き、また、新たに」同前 No. 258、2016年9月
- シリーズ『青松』を読む⑩「手づくりの記録」『彦根論叢』No.410、2016年12月
- シリーズ『青松』を読む⑪「手づくりで録す」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 259、2016年10月